広がる国際貢献の輪
AMDAの15年 ▽中△

貧困層の自立を支援

基盤づくり

国内外の災害被災地に速やかに医療チームを派遣し、傷ついた住民の手当てに当たる―。その瞬発力、行動力は、国際医療ボランティア団体・AMDA（本部・岡山市檜津）を象徴する。

「実は緊急救援は活動資金ベースで見た場合、全体の二割程度にすぎません。大半は、途上国などの衛生改善や生活能力向上に向けた長期的な基盤づくりに注がれています」

本部でプロジェクト推進を担当する岡安利治さん（三二）は力を込める。

インドでの無医地区巡回診療（一九八八年）、ネパールの地域保健推進（九一年）、ルワンダの病院再建（九四年）…。華々しい緊急救援とは異なる地道な支援を、八四年の設立以来、世界各地で積み重ねている。

■定着

九七年、新たな長期支援策が加わった。発展途上国の貧しい層を対象に、医療、教育、経済の面で住民の自立を促す活動だ。「ABC（アムダ・バンク・コンプレックス）プロジェクト」と呼ばれ、ケニア、ルワンダ、ウガンダなどでスタートした。

医療面は衛生教育が柱。現地のスタッフが日常生活やマラリアなどの感染症防止策を指導し、住民の健康維持や乳幼児の死亡率低下を目指す。教育はミシンなどを使った職業訓練を行い、経済面では小規模な融資を手掛ける。

緊急救援は、洪水などの自然災害時が二週間から一カ月、紛争などの人的災害時がおおむね数カ月で終了する。だが、ABCプロジェクトは息の長い仕事となる。

「救援チームが引き揚げた後のことを考え、"援助漬け"にするのではなく、多彩なアプローチで自立を支援する」

岡安さんは同プロジェクトの意義を話し、開始から二年たった現状を「試行錯誤もあったが、定着しつつある」と位置付ける。

■施設建設

自立的な医療活動の展開に向けて、小児医療の施設を建設する運動もネパール、ミャンマー、ウガンダで進行。ネパールには昨年秋、子ども病院が建設され、ミャンマーには今年十一月、六十床の入院施設やICU（集中治療室）を備えた小児病棟が完成した。

AMDAがウガンダで実施しているミシンを使った職業訓練。自立に向けたプロジェクトが各地で進む＝今年3月、AMDA提供

医療、教育、経済 息長く

「ミャンマーでは、医療施設や医薬品が慢性的に不足している。国の将来のためにも、次代を担う子どもたちのための医療施設をつくり、継続的な援助を行うことが求められていた」

同国で九六年から翌年にかけて巡回診療を行った国立岡山病院（岡山市南方）小児外科の吉岡秀人医師（三四）は、こう指摘する。

このほか、海外から医師を招き、日本国内の病院や保健医療施設で技術力向上を目指す研修受け入れや、アフリカでの農業支援、岡山県と共同で進める中国・江西省の環境改善など、多彩な事業を通じた国際貢献を展開する。

■人間尊重

AMDAの取り組み、国際協力の精神は、地域にも徐々に浸透する。その活躍に刺激された市民らが集まり、世界に発信できる街づくりを目指して九四年から毎年、岡山県内で「NGOサミット」を開いている。

主催する「国際貢献トピア岡山構想を推進する会」（トピアの会）の藤木茂彦事務局長は「小学生による国際姉妹校縁組や宗教者同士の人道援助ネットワークなどがサミットから相次いで誕生し、国際貢献への市民の関心も高まっている」と、地域の国際化の基盤づくりに手ごたえを話す。

医療、教育、宗教、環境、福祉と、岡山県の精神風土に基づいて回を重ねてきたNGOサミット。六回目は「人間尊重」を総合テーマに、十日から岡山県内各地で国際会議や市民交流を繰り広げる。